琉球大学学術リポジトリ

琉球大学における民俗学教育の歩み

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科
	公開日: 2019-04-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 赤嶺, 政信, Akamine, Masanobu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44235

琉球大学における民俗学教育の歩み

赤嶺政信

私は、琉球アジア文化専攻の琉球民俗学コースの担当教員として定年退職を迎えることになるが、この機会に、私が関わってきた琉球大学（以下では琉大）における民俗学教育の歩みについて書き記しておくことにする。民俗学教育とは言っても、教育の内容に関することではなく、教育に関する組織をめぐる問題に限定されることをおことわりしておきたい。

本題に入るまえに、関連する私の学歴について述べることから始めよう。琉大の理工学部電気工学科へ入学したのは、沖縄が日本に復帰する一九七二（昭和四七）年の四月のことであった。入学後は、理工系の勉強にさっぱり意欲がわかず、一方で法文学部に「人類学」という学問を学べる学科があることを知り、途中で転学部転学科をすることにした。法文学部の社会学科には、一九七二年に教授・馬淵東一、助教授・饒平名健爾の体制で社会人類学講座が設立されており、その社会学科

への転学科が認められて社会人類学を専攻した。当時の琉大には学生のサークルとしての「民俗研究クラブ」があってクラブ活動は盛んに行われていたが、民俗学を専攻できる教育組織は存在していなかった。

一九七八年の琉大卒業と同時に、筑波大学大学院修士課程の地域研究科に進学した。筑波大学の大学院は、人類学と民俗学の両方が学べる環境になっていたが、地域研究科での指導教員になっていただいたのは民俗学の宮田登

先生で、「門中と村落―沖縄南部離島久高島における事例研究―」というタイトルの修士論文を提出して、一九八一年の三月に地域研究科を修了した。

筑波大学でさらに一年間の研究生生活を終えた一九八二年に沖縄に戻り、沖縄大学等での非常勤講師の仕事を五年間ほどして後に、琉大に採用されたのは一九八七（昭和六二）年の四月であった。私を採用してくれたのは、私にとって古巣である法文学部の社会学科で、社会人類学の講師としての採用だった。ただし、社会学科で仕事をしたのは一年間だけで、翌年の一九八八年には、比嘉政夫先生とのトレードというかたちで、当時の短期大学部（後に廃部）に転任となった。さらに五年後の一九九三（平成五）年には、短期大学部から教養部への転任となるが、国立大学の教養部廃止という全国的な流れの中で、琉大においても四年後の一九九七（平成九）年に教養部が廃止されることになる。短期大学部と教養部時代に私が担当した科目は共通教育科目の「文化人類学」（現在の「人類文化の比較」）が主で、関連科目として「社会学」や留学生向けの「日本事情」なども担当したが、社会人類学の専門科目の教育に関わることはなかった。

一九九七年の教養部の廃止と連動するかたちで法文学部で改組が行われ、私も法文学部に配置換えとなった。この改組によって琉大にはじめて「民俗学」という学問を専門に学べる組織ができることになる。すなわち、法文学部のなかに「人間科学科」という新しい学科が設置され、人間科学科の中の「地理・人類学専攻課程」の一履修コースとして「民俗学」が位置づけられたのである。私は、民俗学担当の初代の教授をつとめることになるが、同僚として一緒に民俗学を担当してくれたのが、後に熊本大学に転出することになる鈴木寛之氏であった。

さらに法文学部では、二〇〇八（平成二〇）年にも改組が行われた結果、「国際言語文化学科」に「琉球アジア文化専攻課程」が設置され、そこに配置換えとなった私は、新設の「琉球民俗学履修コース」を担当することにな

った。「人間科学科」の「地理・人類学専攻課程」は「地理・歴史・人類学専攻課程」と名称を改め、「民俗学コース」はそのなかに位置づけられことになる。結局のところ、法文学部内に「琉球民俗学コース」と「民俗学コース」という二つの民俗学コースが存在する状況となるが、「琉球民俗学」は同じ専攻内にある琉球史や琉球語学、琉球文学研究などとの連繋が可能で、一方の「民俗学コース」の場合は、同じ専攻内にある社会人類学、考古学との連繋が可能である、いうことで差別化が図られている。

法文学部の改組はさらに続き、二〇一八（平成三〇）年四月には、旧来の法文学部と観光産業科学部が解体となり、「人文社会学部」と「国際地域創造学部」が新設された。私が担当してきた琉球民俗学は、人文社会学部の「琉球アジア学科」のなかの「歴史・民俗学プログラム」のなかに位置づけられ、「地理・歴史・人類学専攻課程」の民俗学は、「国際地域創造学部」（「国際地域創造学科」）の「地域文化科学プログラム」のなかに位置づけられることになった。

以上が琉大における民俗学教育の歴史の大筋であるが、民俗学教育に携わってきた者として、いくらかの雑感を書き留めておきたい。

先述のとおり、私が琉大に採用されたのは一九八七年であるが、民俗学の専門教育に従事するようになるのは一〇年後の一九九七年からである。私が学部教育で専攻したのが社会人類学、大学院での指導教授は民俗学者の宮田登、琉大に採用されたのは社会人類学講座といった事情も手伝って、自分自身の沖縄研究を進めるにあたり、当初は社会人類学（文化人類学）と民俗学を区別する必要はほとんど感じることがなかった。ところが、いざ「民俗学」の担当教員ともなれば、そうも言ってはいられない状況が生じたことになる。

民俗学の担当教員になって以降は、民俗学の勉強にそれなりに努力してきたが、正直言って、今でも学生たちに

民俗学を教えることの難しさを痛感している。その理由について、自分の勉強不足は棚上げしたうえで考えてみると、指導の一環として、日本民俗学の創始者である柳田国男の著書を読むことを学生たちに薦めるのだが、その一方では、民俗学界の中で、柳田民俗学の評価をめぐって揺れてきたという学史的状況と、また、今日においてさえも、柳田民俗学の評価について定説といえるものが確立していない状況があることに思い至る。民俗学の担当教員として定年を迎える機に、そのあたりのことについて思いをめぐらせてみたい。

柳田が没したのは一九六二年だから、すでに六十年近くが経過している。柳田から直接指導を受けた弟子たちを第一世代とすれば、第一世代のほとんどはすでに他界し、現在の民俗学界の中核を占めるのは、第二世代の一部と、第三世代以下の人たちということになる。第一世代と第二世代が学界に同居していた一九六〇年代後半から七〇年代にかけて、出版界を中心にした「柳田国男ブーム」があったことが知られている。

第二世代の代表的存在であり、今や民俗学界の重鎮である福田アジオの『日本民俗学方法序説―柳田国男と民俗学―』が刊行されたのは一九八四年で（所収論文の大半は一九七〇年代に執筆されている）、柳田民俗学の方法（主として「周圏論」と「重出立証法」）に対する根本的な批判の書として学界に迎えられたと記憶している。福田アジオは、ある特定の民俗要素について全国規模での比較研究を行う重出立証法を批判し、「民俗を伝承母胎における歴史的展開を蓄積しているものとして理解し、その諸民俗の相互関連を構造・機能的に分析することを通じて、伝承母胎における歴史的展開過程を明らかにすべきである」とし、その方法のことを「個別分析法」と命名している（福田　前掲　九二～一〇九頁）。

一九六〇年代以降の沖縄研究においては、欧米の機能・構造主義的人類学の影響を受けた社会人類学的研究が、村落単位の家や門中、祭祀組織の分析にめざましい成果をあげているという評価が定着していたこともあって、福

田アジオの柳田批判と個別分析法の提唱は、私にとって非常に受け入れやすいものとして目の前にあった。それを言い換えれば、柳田の著書をろくに読むことなく、福田の論考を通して柳田民俗学を理解したつもりになっていたことにもなる。福田は、一九九二年に柳田民俗学への入門書として『柳田国男の民俗学』を出版しており、福田の柳田民俗学批判は、広く人口に膾炙したものと思われる。さらに、柳田民俗学にナショナリズムと植民地主義を見出して批判した村井紀の『南島イデオロギーの発生―柳田国男と植民地主義―』（一九九二）と、川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』（一九九六）という二冊の著書の刊行もあった。

このような柳田批判の流れのなかにあって、二〇〇〇年代に入ってから柳田民俗学の再評価の動きが目立つようになってきた。代表的なものとして新谷尚紀の『柳田民俗学の継承と発展』（二〇〇五、吉川弘文館）と、岩本通弥の「戦後民俗学の認識論的変質と基層文化論―柳田葬制論の解釈を事例にして―」（『国立歴史民俗博物館報告』一三二、二〇〇六）の二点を揚げておきたい。新谷の著書はタイトルに「柳田民俗学の継承」と謳った点で画期的であり、岩本論文は、一九七〇年代から柳田批判を展開してきた福田アジオとの柳田の葬制論をめぐっての論争を踏まえたもので、柳田民俗学について正当な評価を行うためには必須の論文だと私は考えている。

新谷や岩本の著作の影響を受けて、私自身、沖縄関係を中心にした柳田国男の著書の読み込みと読み直しの必要を感じるようになった。「柳田国男と沖縄」というテーマは、柳田民俗学の評価における重要な論点の一つであり、私自身の柳田国男研究の成果として、「柳田国男の民俗学と沖縄」（『沖縄民俗研究』二六、二〇〇八）をまとめ、以下のような見解を提示した。すなわち、従来の研究史の中で、多くの研究者が言及してきた柳田国男の民俗学における沖縄の占める位置に関して、その研究史と柳田の書いたテキストの検討を通して再考を行うと、柳田の沖縄認識は、「日本全体の最も古い姿を今に残している」、あるいは「日本文化の祖型としての沖縄文化」だとする従来の

理解は、昭和期に入る以前の柳田のテキストに関しては言えるとしても、昭和に入って以降の柳田の書いたものに関して言えば誤っており、柳田は沖縄の民俗文化の独自の変化につても十分注意を向けていた、というのが拙稿の結論であった。

さらに、福田アジオが批判した柳田国男の唱えた「重出立証法」も、私には決して否定し去るべきものとは思えないようになった。もちろん、伝承母体を重視する福田のいう個別分析法も取扱うテーマによっては有効だと考えており、修士論文をもとに執筆した私にとって最初の学術論文である「沖縄久高島の「門中」制―久高島村落祭祀組織理解のための予備的考察―」(『民族学研究』四七-四、一九八三)は、方法論としては個別分析法的なものである。

私にとって重出立証法とは、ある特定の民俗文化(葬制、建築儀礼、婚姻、等々)についての広域的な資料収集を行ったうえで、それらの資料の「比較と綜合」(柳田が多用する用語)を行うことによって、ある特定地域だけの資料だけからではみえてこない、民俗資料のもつ意味やその変遷史に関わる情報を明らかにすることが可能になるものだと理解している。私は、一九八五年に「トゥハシリ考―沖縄の家の神についての一試論―」(『歴史手帖』十三-一〇)という論文を書いたが、執筆当時には自覚はしていなかったことだが、この論文は、沖縄全域を対象にしたトゥハシリをめぐる「比較と綜合」という方法(重出立証法)によるものだったことを後になって気づくことができた。重出立証法を実践した「トゥハシリ考」の評価は読者の判断に委ねざるを得ないが、私自身は、その実践は成功していると考えている。最新作の『キジムナー考―木の精が家の神になる―』(榕樹書林、二〇一八)も重出立証法を実践した研究成果であるが、成否の判定は、これもまた読者にゆだねることにしたい。

民俗学の担当教員として定年を迎えるにあたり、琉大における民俗学教育の歩みについて述べてきた。民俗学教

育に直接的に関わってきた者としての雑感も述べたが、琉大における民俗学教育の歩みを確認し、さらに未来を展望する際に、拙稿が何らかの役に立つことがあれば幸いである。